

# 結果構文「てある」の統語構造について

宇田 千春

## 概要

日本語には結果構文と呼ばれる統語形式が2つ存在する。1つは動詞の動名詞形（「て」で終わる）に助動詞「いる」を付加したもの、もう1つは同じ形に助動詞「ある」を付加したものである。どちらも動名詞と助動詞の結合した複合述語の形をとる。本稿では後者の結果構文「てある文」に注目し、主辞駆動句構造文法 (HPSG) の理論に基づいて、その統語的性質を明らかにすることを試みる。従来より「てある文」には2種類が存在すると考えられてきた。1つは基本文（「ある」の付加しない文）の項構造をそのまま維持したもの、もう1つは基本文の主語が脱落し目的語が主格を受けた主語になるという、表面上、いわば自動詞化を受けた形になるものである。ここではとくに敬語化現象を通して、後者の「てある文」の主格名詞が主語の特性を満たしているとは言えず、逆に目的語の特性を保持していること、したがってそれは自動詞化を受けてはいないことを証明する。そしてさらに「てある」文は2種類とも複節構造をとり、繰り上げ構造を有することを論じる。

This paper investigates the syntactic properties of *te-aruru* resultatives in Japanese in the framework of Head-driven Phrase Structure Grammar. Through the examination of the subject/object honorification of the resultatives, it will be argued that the so-called “intransitivizing” resultative does not involve intransitivization, and that it has a biclausal, raising structure. *Te-aruru* construction involves a complex predicate consisting of a gerundive verb and the resultative auxiliary verb *aru*. Complex predicates have always stimulated the controversy over whether they are to be analyzed lexically or non-lexically, and correspondingly, whether they are to be analyzed as monoclausal or biclausal. One type of the *te-aruru* resultative, the “intransitivizing” resultative, allegedly presents problems for this dichotomy because its data seem to paradoxically support both lexical and non-lexical analyses. This paper carefully examines the honorification operation and demonstrates that *te-aruru* resultatives do not in fact support a lexical analysis. The data of honorification are further explored to show

that the resultative auxiliary *aru* is a raising verb rather than an equi-type control verb. Given this proposal, the very puzzling behaviors of *te-aru* resultatives find a straightforward unified account.

キーワード: 結果構文 (resultatives)、自動詞化 (intransitivization)、主語敬語 (subject honorification)、目的語敬語 (object honorification)、複節構造 (biclausality)、繰り上げ構造 (raising)、願望文 (desideratives)

## 1 はじめに

日本語には、動名詞や不定詞などの形の述語に相 (aspect) や様態 (voice) などを表す述語を付加して、もともとの過程 (process) や出来事 (event) を「受動」「使役」「結果」「完了」などの特定の視点から眺めた姿で表す構文が多く存在する。そのような構文は、表面上2つ以上の述語が1つになっているということから複合述語 (complex predicate) 構文と呼ばれる。複合述語はどのように表面上は一統きの述語のように見えるのであるが、それが一体、統語的に見ても1つの述語として機能しているのか、それとも統語的には各々独立して機能している複数の述語が表面上隣接して現れているだけなのかは、従来意見のわかれてきたところである。複合述語が、統語上も1つの述語であるとする構造は「単節 (monoclausal) 構造」とされ、複数の述語が独立していると考えられる構造は「複節 (biclausal) 構造」とされてきた。

本稿は、日本語の結果構文である「てある文」の HPSG での分析をおこない、その統語的特徴を明らかにする事を目的とする。結果構文とは、文字どおり、任意の過程の結果として生じる状態に言及する構文である。日本語においては、動詞の動名詞形に「ある」「いる」などの助動詞が形態的には付加される、いわゆる複合動詞の形をとって表される。「てある文」はそのような結果構文の1つであるが、他の、例えば「ている文」とは異なるいくつかの特性を備えていることが知られてきた。例えば、「てある文」には統語的性質の異なる2つのタイプがある。そしてその1つは、まるで受動文のように、もともとの主語が失われ、目的語が主語になっているように見えるのである。ここでは、特にその「てある文」に注目し、その目的語は実は主語にはなっていないことを示した上で、「てある文」が複節構造をとること、また結果を表す述語「ある」が「繰り上げ動詞」であることを論じる。

## 2 2種の「てある文」

日本語の結果構文「てある文」は複合動詞の形をとる。すなわち動詞の動名詞形（「て」で終わる）に助動詞「ある」が形態上付加される。そしてこの複合動詞は2タイプの「てある文」を形成することになる (Martin 1975) が、それは次の (2a,b) に相当する。

- (1) 京子がもう手紙を書いた (なんて)

- (2) a. 京子がもう手紙を書いてある (なんて)  
 b. もう手紙が書いてある (なんて)

すなわち上の「てある文」では、動詞「書く」の動名詞形「書いて」に結果相を表す助動詞「ある」が付加されている。「ある」の付加されていない「基本形」の(1)と比較すれば明らかなように、(2a)は「ある」が付加されているだけで、動詞「書く」のもともとの下位範疇化に関する特性には変化が見られない。つまり、(1)でも(2a)でも、「書く」の主体(agent)であり主語である「京子」と対象(theme)であり目的語である「手紙」がそれぞれ主格「が」と対格「を」受けて現れている。一方(2b)では、その「京子」が表面に現れず、同時に「手紙」が対格ではなく主格を受けて現れている。すなわち、(2b)は一見、受動化にも似た自動詞化(intransitivization)を受けているようなのである。<sup>1</sup>以下では、(2a)のタイプのものを「てある 1」、(2b)のタイプのものを「てある 2」と呼ぶことにし、この二者は、同一ではないにせよ全く異質のものではないと言う仮定の基に考察を進めることとする。また、便宜上、意味的あるいは統語的に埋め込み構造が認められる場合、下位に来る動詞を「下位動詞」、上位に来る動詞の要素を「上位動詞」と呼ぶ。例えばここでは、動名詞の形をとる動詞(例えば「書いて」)を「下位動詞」、結果相を表す助動詞「ある」を「上位動詞」と呼ぶこととなる。

### 3 「てある 2」

#### 3.1 「てある 2」の主格名詞の主語的特性

さて、上に述べたように、「てある 2」は下位動詞の主語が表面に現れず目的語が主格を受けているが、これは厳密にどのような意味をもつのであろうか。従来考えられてきたように、この「てある 2」は本当に自動詞化を経た形であり、下位動詞の目的語は本当に主語になっているのであろうか。この節では、「てある 2」の主格名詞が主語であるとする先行研究での議論を検証し、それが必ずしも支持されないことを証明する。

Matsumoto (1990b) は、この「てある 2」に現れる主格名詞が文全体の主語となっていることを示すため 5 つの証拠を提出している。それによれば、(1)「てある 2 文」は、主語のない文というような不完全さを感じさせない。(2) 主語の省略された句を含み、その句の主語が、文の主節主語と同一指示でなければならない構文(「ずに構文」)で、「てある 2」

<sup>1</sup>「てある文」の容認度には、かなりの個人差が認められる。特に「てある 1」に関しては、全く認めない話者が多く見られる。これは、一般動詞として「存在」を表す「ある」が無生物の主語しかとらないという制約をもつのに呼応して、結果の助動詞の「ある」の主語にも同じ制約を認める話者がいるためである。すなわち、「てある文」で表される出来事は、主体が意図的に行なった行為の結果に限られる(Matsumoto 1990a)ので、行為の主体と主語の一致する「てある 1」は、双方の制約の葛藤のため容認されないこととなる。ただし無生物の制約は、必ずしも全ての日本語話者に見られるわけではない。また、同じ「存在」を表す一般動詞「いる」は、逆に生物の主語しかとらないという制約を持つが、結果構文「ている」の助動詞の「いる」の主語にはそれと同じ制約が認められないことにも注意する必要がある。(「本がおかれている」「事件が新聞に載っている」等を参照。)

に現れる主格名詞は、句の主語との同一指示を許す。また (3) 主格主語は、状態を表す文では「総記」の解釈を受け、変化を含むような状況を表す文では「中立叙述」の解釈を受けることが知られているが (久野 1973)、「である 2」の主格名詞は、この点において主格主語と全く同じふるまいを見せる。(4)「である 2」の主格名詞は再帰代名詞を束縛できる。(5)「である 2」の主格名詞は主語敬語化を起こすことができる。

しかし、これらの 5 つの特性は、「主語」という概念を使わなくても、例えば「最も斜格性が低い (least oblique) 項」の特性として説明することが可能である。主格名詞が「である 2 文」の唯一の明示的な項であるならば、当然最も斜格性が低い項であるので、「最も斜格性が低い項」の特性としてこれらの特性を説明することができるはずである。さらに重大なことに、(4) と (5) の再帰代名詞と主語敬語化に関する証拠は、事実とは容認し難いと思われる。この点について詳しく調べてみる。

まず下にあげた文を見てみよう。この文について Matsumoto (1990b) は (3a) (=「である 2」) では再帰代名詞「自分」が主格名詞「田淵」を指すことができるが、(3b) (=「である 1」) では再帰代名詞「自分」が対格名詞「田淵」を指すことはできないと指摘している。

- (3) a. 田淵<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>の願いどおりに代打にとってある (こと)  
 b. \*田淵<sub>i</sub>を自分<sub>i</sub>の願いどおりに代打にとってある (こと)

しかし、筆者の判断によれば、(3b) よりは確かに若干容認性が上がるものの、(3a) が容認可能な文とは思われない。「自分の願い」のような主観性の高い句は「自分」の解釈に影響を与えるのではないかと考えられるので、その点を考慮した次の文を参考にされたい。

- (4) a. \*田淵<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>の友達のパーティに招いてある (こと)  
 b. \*田淵<sub>i</sub>を自分<sub>i</sub>の友達のパーティに招いてある (こと)

筆者の判断では、(4a) で、「田淵」が「自分」を束縛する (同一指示となる) 解釈は全く得られないと考えられる。このことから、再帰代名詞の束縛現象が「である 2」の主格名詞が主語であることを示すという主張は支持されることがわかる。

また、主語敬語化の現象を見てみよう。Matsumoto (1990b) では、「である 2」の主格名詞は主語敬語化 (「になる／られる」が動詞に付加される) を起こしうるとして、次の例をあげている。

- (5) a. ?先生が代打にとってあられる (こと)  
 b. \*先生を代打にとってあられる (こと)

すなわち、Matsumoto (1990b) によれば、(5a) (「である 2」) では主格名詞「先生」を対象にした主語敬語化が可能であるが、(5b) (「である 1」) では対格名詞「先生」を対象にした主語敬語化は不可能であるという。しかし、筆者には (5a) が容認可能な文とは思われない。



い。<sup>2</sup>「先生」にもっと自然に起こり得る状況を表す次の文もそのことをさらに示している。つまり、筆者の判断によれば、(6) はどちらも極めて不自然な文であり、容認可能とは思われない。

- (6) a. \*先生がパーティに招いてあられる (こと)
- b. \*先生をパーティに招いてあられる (こと)

このように、「てある 2」の主格名詞は主語敬語化を起こしうるという主張も支持されず、以上のことから、「てある 2」の主格名詞が主語であるという主張には疑問の余地があることが明らかとなった。

### 3.2 「てある 2」の主格名詞の目的語性：目的語敬語化現象

さて、ここで「てある 2」の主格名詞は実は目的語であるということを明らかにしたい。このことは、「てある 2」が受動化にも似た自動詞化を受けているという従来の考え方の不備を指摘する重要な意味を持つ。

もう一度敬語化現象を見てみよう。敬語化は、一種の一致現象 (agreement) と考えられる。主語敬語化は、主語が敬意を払うに足る対象である際、その主語を下位範疇化する述語に敬語の形態（「お...になる」）が現れ、目的語敬語化は、目的語が敬意を払うに足る対象である際、その名詞句を目的語として下位範疇化する述語に敬語の形態（「お...す」）が現れる。例えば、次のような例が考えられる。下線部は敬語化の形態素を表す（時制辞も含む）。

(7) 先生が本をお読みになった。（主語敬語）

(8) 京子が先生をお助けした。（目的語敬語）

では、「てある 2」が敬語化を受けるときはどのようになるだろうか。(9) の「てある 2 文」に対し、(10) の主語敬語化が無理なことは前述のとおりである。

(9) 先生が招いてある。

(10) \*先生がお招きになってある。

実は、興味深いことに、このような場合最も自然な敬語化の形は (11) のような目的語敬語化なのである。

<sup>2</sup>Matsumoto (1990b) は、確かにこの文が少々不自然な文だとは認めているが、それは単に、もそもそ主語の「意図的な行為」しか敬語化の対象にはなりにくいという意味的制約 (volitional condition) があるせいだとしている。しかし、この意味的制約こそ全く認め難いことは次の例からも明らかである。「倒れる」や「亡くなる」は意図的な行為とは思われないが、次の文は全く自然な文である。

- (i) a. 先生が脳卒中で倒られた。
- b. 先生が急に亡くなられた。

(11) 先生がお招きしてある。

すなわち、「てある 2 文」の主格名詞（ここでは「先生」）は、主語敬語化を起こさず、目的語敬語化を起こすのである。この事実、とりも直さず、この名詞句が文の唯一の項でありながら、それが主語ではなく目的語であることを意味する。

読者の中にはこのような結論に疑念をもち、次のような反論をする向きもあるだろう。つまり、目的語敬語化は、本当に統語上の目的語が起こしているとは限らない。例えば、意味的な項構造の中で、「対象」「客体」(patient)である項が起こしていると考えられないのか、ということである。そうすれば、「てある 2」の主格名詞はどんな文法的役割を果たそうとも対象／客体の項であることには変わりなく、主語であってもこのタイプの敬語化を受けることも納得がいく。しかしこのような反論は残念ながら受け入れられない。ここで、この事実の意味を確認するために、受動文の敬語化現象を見てみよう。

受動文は、よく知られているように、能動文の目的語が受動文の主語に対応し、下位動詞の対象／客体の項が、主格を受け、文全体の主語として機能している。このときの主格名詞が敬語化を起こすとき、どのような結果が得られるだろうか。

## (12) 先生が招かれた。

(13) 先生がお招かれになった。(主語敬語化)(14) a. \*先生がお招かれした。(目的語敬語化)b. \*先生がお招きされた。(目的語敬語化)

興味深いことに、「てある 2」の場合とは対照的に、受動文の主格名詞は主語敬語化は起こすが、目的語敬語化は起こさない。上述のように、この主格名詞は「てある 2」の主格名詞と同様、下位動詞の対象／客体の項である。もし目的語敬語化が、本当は対象／客体の項によって引き起こされるのであれば、受動文の主格名詞もこのタイプの敬語化を起こすはずである。このことは、やはり、「てある 2」の主格名詞が目的語であるという上の結論を支持するものと考えられる。

「てある 2」の主格名詞が目的語であるということはいくつかの重要な意味を持つ。まず、「てある 2」は、従来考えられていたように下位動詞の項の文法的機能の変更を引き起こしてはいないということである。これは、「てある 2」を、語彙的規則 (lexical rule) などによって、語彙のレベル（前統語的レベル）で派生させる大きな動機の 1 つが消えることを意味する。換言すれば、「てある 2」の下位動詞と上位動詞（ある）は統語のレベルでも独立した 2 つの動詞として機能する可能性を示唆しているといえる。

### 3.3 「てある 2」の目的語敬語化の形態と複節構造的性

ではそのことをふまえ、「てある 2」の敬語化の形態をよく見てみよう。つまり、下位動詞と上位動詞が統語のレベルで 1 つの述語として機能しているか、2 つの述語として別々に

機能しているかということである。その助けとして、まず、「てもらう」受益文の主語敬語化を見てみよう。

(15) 先生が京子に本を読んでもらいになった。(主語敬語化)

(16) 京子が先生に本を読みになってもらった。(主語敬語化)

この場合の下位動詞は「読む」であり、上位動詞は受益動詞「もらう」と考えられる。(15)で、主語敬語化を起こしている「先生」は上位動詞「もらう」の主語、(16)で、主語敬語化を起こしている「先生」は下位動詞「読む」の主語である。このとき、敬語化を表す形態素「になる」が、それぞれ、上位動詞「もらう」と下位動詞「読む」の直後に現れていることに注意されたい。つまり、複合述語構文においては、上位動詞の主語による主語敬語化では、敬語化の形態素「になる」が上位動詞の直後に、下位動詞の主語による主語敬語化では、同じ敬語化の形態素「になる」が下位動詞の直後に現れることがわかる。これは、すなわち、少なくともこの複合述語構文においては、下位動詞と上位動詞が結合して1つの下位範疇化の情報を持つのではなく、統語のレベルで、下位動詞・上位動詞がそれぞれの下位範疇化に関する情報を、独立して持っていることを意味する。

ところで、別のタイプの「てもらう」受動文での主語敬語化を見てみよう。

(17) 先生が京子に助けてもらいになった。(主語敬語化)

(18) \*京子が先生に助けになってもらった。(主語敬語化)

この場合、下位動詞は「助ける」であり、上位動詞は受益動詞「もらう」であると考えられる。(15)、(16)と同様、(17)で主語敬語化を起こす「先生」は上位動詞「もらう」の主語であり、(18)で主語敬語化を起こすはずの「先生」は下位動詞「助ける」の主語である。(17)は「になる」が上位動詞「もらう」の直後に現れ、適格な文であるが、(18)は、「になる」が下位動詞「助ける」の直後に現れているにも関わらず容認可能な文とはいえない。<sup>3</sup>表面的にはほとんど違いのない(16)が可能であるのに、(18)はどうして不可能なのか。特に、後者に限り、下位動詞の主語が主語敬語化を起こせないとは、一体なぜなのだろうか。端的に言えば、これはこの名詞句が、この文の中で統語上の主語として下位範疇化されていないからと考えられる。さらに言うならば、(16)に対して(18)の文が不適格であるのは、上位動詞の主語「京子」が下位動詞「助ける」の項でもあることが関係すると考えられる。すなわち、これは英語などに見られる受動文に対応するタイプの受益文なのである。厳密には、(17)、(18)は下位動詞の目的語が文全体の主語になり、下位動詞の主語であった項は主体を表す付加詞(英語の *by-phrase* に相当する)になるような語彙的な派生を経ていると考えられる。

<sup>3</sup>同じような意味を表す敬語文で可能なものといえば、「もらう」の謙譲形「いただく」を使った、「京子が先生に助けていただいた」であろう。

この考えに従えば、(18)の「先生」は、付加詞であり、統語的に主語として下位範疇化されていないので、主語敬語化が起こせないことも説明がつく。

さて、(17), (18)の受益文が、英語の受動化に類推されるような語彙の派生を経ていて、下位動詞が上位動詞と独立した下位範疇化の情報を統語のレベルで持っていないとすれば、(17)の敬語化の形態から何がわかるだろうか。語彙の違いを除けば、(17)の述語は(15)と同じ形をしていることに注意されたい。つまり、下位動詞と上位動詞が独立した下位範疇化情報を持たず1つの複合述語として機能しているときは、敬語化の形態素はその複合述語全体の直後に現れ、表面上、上位動詞の直後に現れるのと区別が付かないということである。

では「てある2」の目的語敬語化の形態はどうであろうか。

(19) 先生がお招きしてある。

(20) \*先生が招いておありする。

(19)では目的語敬語化を表す形態素「す」は下位動詞「招く」の直後に現れ、(20)では、同じ形態素は上位動詞「ある」の直後に現れている。上述の考え方に従えば、もし「先生」が複合述語「招く＋ある」全体の目的語であるならば、目的語敬語化の形態素「す」はこの全体の直後、すなわち「ある」の直後に現れるはずである。しかしこの形(20)は不適格である。一方、適格な(19)は、つまり、「先生」が下位動詞「招く」だけの目的語として下位範疇化されていることを表している。換言すれば、この形は、「てある2」の下位動詞と上位動詞が独立した下位範疇化情報を統語のレベルで持っていること、主格名詞は下位動詞の目的語という機能を保持していることを表しているのである。下位動詞と上位動詞が独立した下位範疇化情報を統語のレベルで持っていることは、この構文が複節構造を持つことを示唆すると考えられる。<sup>4</sup>

## 4 「てある2」の統語構造: 提案

### 4.1 繰り上げ構造

「てある2」の下位動詞と上位動詞が独立して下位範疇化情報を持っているということから、「てある2」がどのような統語構造をもっているのかを考えよう。下位動詞と上位動詞がそれぞれ独立した下位範疇化情報を持つ複節(biclausal)構造といえば、例えば使役動詞などのように同一名詞句(Equi-NP)タイプの制御構造(control structure)が考えられる。では、「てある2」結果構文も、上位動詞「ある」の唯一の項が制御子(controller)として下位動詞の項(controllee)を制御する(同一指示となる)、一種の主語制御(subject control)タイプの制御構造と考えることができるだろうか。

<sup>4</sup>主格名詞が下位動詞の目的語であるからと言って必ずしも複節構造を示唆するとは限らないという反論もあることをここに断わっておく。しかし少なくとも(16)と(18)の対比を認める限り、敬語化を説明するには「下位／上位動詞の主語／目的語」と言うのでは不十分で、文全体の「単／複節構造」と関連する、統語上の下位範疇化情報を考慮に入れねばならないと思われる。

残念ながら、「てある 2」結果構文が主語制御タイプの制御構造と考えることは妥当とは思われない。「主語制御」という名を「最も斜格性の低い項による制御」と言い替えても問題は同じである。まず第 1 に、HPSG の制御理論 (control theory) では、動詞の意味分類と項の意味的役割に基盤を置き、主語制御は主体的関与型 (commitment-type) の動詞と志向型 (orientation-type) の動詞に限られ、制御子もそれぞれ、主体的関与者 (committor) と経験者 (experiencer) に限られる (Pollard & Sag 1994)。しかし一方「てある 2」の上位動詞「ある」がこの定義に当てはまらないこと、またその項である主格名詞が主体的関与者でも経験者でもないことは明らかである。

実のところ、上位動詞「ある」の項と思われる主格名詞は、上述のように、下位動詞の対象／客体の項であると共に統語的にも目的語であるが、上位動詞に対しては、意味的にも統語的にもどのような役割を果たしているのか明らかではない。また、「ある」も、ある行為を結果という特定の相 (aspect) で表すという働きをするだけで、それ自身、主題関係に関わるような語彙的な意味内容を持っているとは考えられない。

このようなことから、「てある 2」は同一名詞句型の主語制御構造というよりは、繰り上げ構造 (raising structure) をとっていると考える方が妥当であると思われる。同一名詞句型の制御構造では、制御子が、埋め込み補文の表面に現れない名詞句と同一指示となるが、その制御子と制御される名詞句の間に指標 (index) が共有されることによってその同一指示を説明する。一方繰り上げ構造では、2つの名詞が同一指標を受けるだけでなく、2つの名詞句の統語意味素性 (SYNSEM features) がすべて共有される。つまり、「てある 2」では、上位動詞「ある」は 1つの名詞句を下位範疇化するものの、その名詞句にそれ以上の統語情報や意味役割は与えない。「ある」の統語的項である名詞句は、その統語的、意味的素性を上位動詞「ある」によっては指定されず、それと対応する名詞句が下位動詞によって指定される統語・意味素性をそのまま共有する。「ある」の項は、名詞句であること以外の情報は、いわば「空」であって、それはそのまま下位動詞の項としての情報を受け継ぐことになる。

こう考えると、動詞の項の文法機能が動詞の下位範疇化に関する情報の一部と考えることにより、「ある」の項である主格名詞の文法機能が目的語であることも、下位動詞の項としての情報の反映として理解することができるだろう。

繰り上げ構造という分析は、意味の側面からも納得のいくものである。すなわち、繰り上げ構造であるということは、その述語は主体的関与型の動詞や志向型の動詞であるという制約もなく、制御子にあたる名詞句が主体的関与者や経験者である必要もない。実のところ「ある」の項にあたるその名詞句は「ある」の項としての意味役割を持っていない訳であるが、それも結果構文の意味内容を考えると適切なものと思われる。繰り返しになるが、結果構文とは、結果という相からある出来事を描いているのであって、特定の項がなんらかの意味役割を持つような構文ではないのである。

#### 4.2 主格付与と下位動詞の下位範疇化素性

前節では、結果構文の上位動詞「ある」は繰り上げ動詞であるという主張とその動機づけをおこなってきた。この主張に関連して、もう2点、考察することがある。それは、「てある2」の項に対する主格付与の問題と、下位動詞の下位範疇化素性の問題である。

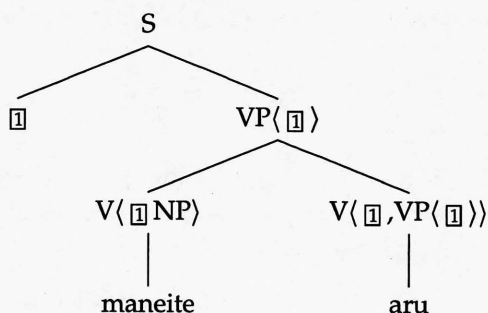
「てある2」の「ある」が繰り上げ動詞であると考ええるということは、日本語の名詞に対する格付与が語彙的におこなわれるとすれば、「ある」の項の主格は、上位動詞「ある」ではなく、下位動詞の下位範疇化素性によって付与されていると考えることを意味している。つまり、「ある」が繰り上げ動詞である限り、当該主格名詞は、「ある」の項としては、名詞句であること以外には統語・意味的情報を受けていないのであるから、その主格という格は当然、下位動詞の項として下位動詞によって下位範疇化されている素性の中で与えられていることになる。格付与が語彙的におこなわれているということ、主格が下位動詞の下位範疇化素性の一部として与えられていることについては、後に、それを支持する議論をさらに示すことにする。

一方、「てある2」では、下位動詞の主語が表面に現れず、目的語が主格を担って、一見、自動詞化を受けたかのような効果が見られることは初めに見た。どうしてこのようなことになるのであろうか。下位動詞の下位範疇化素性は、一体どうなっているのであろうか。

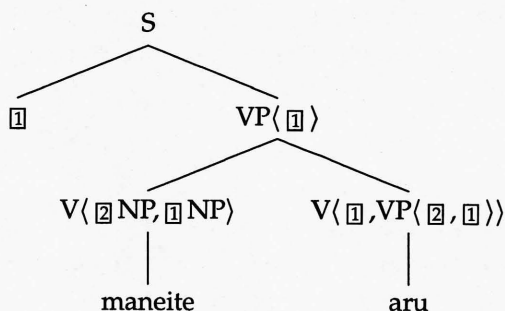
これには、少なくとも2つの方法が考えられる。すなわち、1つには、語彙規則により、下位動詞の下位範疇化素性から、主語にあたる名詞句を文字どおり削除してしまうこと。そうすれば、上位動詞の項は下位動詞の下位範疇化素性に残る目的語の名詞句と統語・意味構造を共有することになる。この目的語は、その主語削除の後では最も斜格性の低い名詞句となるので、表面上は、「主語から主語への繰り上げ」に類似した形をとることになる。ただし、この方法では、語彙規則により、全ての他動詞に対し、基本の下位範疇化情報を持ったものと並んで、主語のないタイプの下位範疇化をしたものが存在することを想定することになり、余剰性という点に問題があると思われる。一方、もう1つの方法としては、下位動詞の主語を削除することはせず、単に、上位動詞「ある」の項が下位動詞の目的語と統語・意味構造を共有すると指定する方法がある。これによれば、下位動詞の主語は、単に、表面に現れず、下位動詞の下位範疇化素性の中に残されたままになる。ただ、この方法をとると、「目的語から主語への繰り上げ」という、他に例を見ない、特殊なタイプの繰り上げ操作を想定することになってしまう。さらに、この後者の方法をとっても、語彙規則をたてることは必要であることにも注意されたい。すなわち、上述のように下位動詞の下位範疇化情報の中で目的語への主格付与がおこなわれるのであれば、その格付与をおこなう語彙規則が必要なのである。

以下に、この2つの方法がどのような「てある2」の構造を想定することになるのか、直観的に表すような簡単な樹形図の形で表してみる。

(21) a. 「てある 2」(主語削除あり)

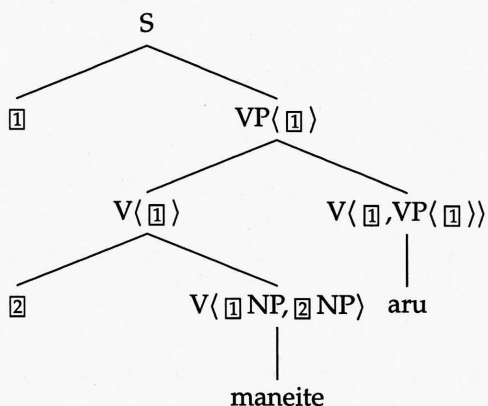


b. 「てある 2」(主語削除なし)



(22) は、「てある 1」と「てある 2」が根本的には共通点があるという考えに基づき、これらに対応する「てある 1」の構造を表している。

(22) 「てある 1」



(21a) では、「ある」と結合する下位動詞は、語彙規則により、主語が下位範疇化素性から削除されている。この「自動詞化」の操作を独立して設定することにより、「てある 2」の「ある」自体の下位範疇化素性は、「てある 1」の「ある」の下位範疇化素性とほぼ同じでよ



いことに注目する必要がある。つまり、「てある 1」と「てある 2」に共通する、「ある」結果構文を求めるのであれば、自動詞化の語彙規則をたてる (21a) の方法が優位であるように思われるのである。

このように、「てある 2」の下位動詞の扱いについては、2つの方法のそれぞれに問題があり、主語を削除する方法の方がわずかに優勢であるように見える。が、ここでは、あえて、もう一方の、主語を残したまま主格だけを付与して、目的語を「ある」の項と統語・意味構造共有させる方法を選びたいと思う。次節では、この選択の動機づけをおこなう。

次節に移る前に、これまで述べた主張を簡単にまとめておこう。(1)「てある 2」、そして恐らく「てある 1」も、統語的に複節構造を取っており、上位動詞「ある」は繰り上げ動詞である。(2)「ある」の項に付与される主格は、「ある」の下位範疇化情報ではなく、下位動詞の下位範疇化情報の中でその目的語に付与されている。(3)「てある 2」の下位範疇化素性は、項の数や文法機能は保持したままで、目的語の格素性のみ対格を主格に変えるような語彙規則を受ける。

## 5 使役文と「てある 2」

使役文が「てある 2」タイプの結果構文になったものは、上述の問題、特に「ある」が繰り上げ動詞であることと主格付与が下位動詞の下位範疇化情報としておこなわれているという主張に関して、意義深いデータを与えてくれる。次の例をまず見てみよう。

- (23) a. 京子が本を読む。  
 b. 太郎が京子に本を読ませた。  
 c. 太郎が京子に本を読ませてある。 「てある 1」  
 d. \*京子が本を読ませてある。 「てある 2」  
 e. 京子に本が読ませてある。 「てある 2」

(23b) は (23a) を使役文にしたものである。(23c) はこれに対応する「てある 1」文であり、(23d,e) は「てある 2」文である。(23c) についていえば、本来主格を付与される可能性のある (= 主語以外の) 名詞は 2 つあるはずである (= 「京子」と「本」)。しかし、実際には、主格を付与されるのは、使役構文のさらに下位動詞にあたる「読む」の目的語である「本」だけである。これは何を意味するのであろうか。

使役構文のさらに下位動詞の目的語「本」に主格が付与されているということは、まず第 1 に、「本」が「ある」の補文の直接の主要部に下位範疇化されていることを意味する。「ある」の補文とはすなわち使役構造のことであり、その主要部は使役動詞「させ」または「読ませ」である。「本」は本来「読む」の項でしかないので、この主格付与を保証するためには、(1) 使役構文を語彙的に派生させ、「読ませ」の下位範疇化として、「読む」の項を含ん

だものを想定するか、(2) Gunji (to appear) のように、使役構文は複節構造とした上で、その下位動詞「読む」の項が上位動詞（使役）「させ」の下位範疇化素性に取り込まれることを許すような特別な語彙規則 (“raising” lexical rule) をたてる、という 2 つの方法が考えられる。ここでの議論には、この両者はどちらも同じ説明力をもつが、使役構文の複節構造性を支持する証拠が独立して多く提出されていることから、ここでは便宜上、後者の方法をとることにする。

さて、この (23d,e) がいかにして、「ある」の性質や主格付与のされ方に関わってくるのだろうか。重要なことは、(23d,e) をこれまでに見た「てある 2 文」と照合してみて、「ある」の項と思われるのが使役動詞「させ」の目的語に相当する「京子」であろうと考えられること、そして、それにもかかわらず、その名詞句は与格を受け、別の名詞句「本」が主格を受けているということである。もしも「ある」が繰り上げ動詞でなければ、主格は「ある」の唯一の項に付与されるはずである。しかも、「京子」が与格を受けるのは、(23b) から明らかなように、使役動詞「させ」の働きによるもので、「ある」の項としての「京子」は、この与格を、直接「させ」の下位範疇化素性から受け継いだものと考えられる。これは正に、「ある」が繰り上げ動詞であることの証左である。同様に、「本」は「ある」の直接の項とは考えられないから、それが主格を受けるとするのは、下位動詞の下位範疇化素性でそれが主格を受けているからと考えられるのである。換言すれば、「ある」は繰り上げ動詞であるから、その下位動詞の下位範疇化素性の中での格素性がそのまま現れるのである。

ところで、このように繰り上げ構文で下の格が受け継がれるのは、何もこの日本語の（特に使役文の）「てある 2」構文における特殊な現象ではない。これはもっと一般的な現象で、例えば次の例に見られるように、アイスランド語で主格以外の格が主語に付与される (quirky case) 動詞が繰り上げ構文の中に起こったときにも見られることが知られている (Pollard & Sag 1994)。

- (24) a. Hana virðist vanta peninga.  
her.ACC seems to lack money  
'She seems to lack money.'
- b. Barninu virðist hafa batnað veikin.  
the-child.DAT seems to have recovered from the disease  
'The child seems to have recovered from the disease.'
- c. Verkjanna virðist ekki gæta.  
the-pains.GEN seems not to be noticeable  
'The pains don't seem to be noticeable.'

つまり、この例の主語は、それぞれ対格、与格、属格を受けているが、もちろんこれはそれぞれの主動詞である virðist 'seem' がこれら 3 種の格を付与しているのではなく、これら

の特殊な格はそれぞれの下位動詞 vanta ‘to lack,’ batnað ‘recovered from,’ gæta ‘to be noticeable’ が付与したものである。重要な点は、この主動詞 virðist ‘seem’ が繰り上げ動詞なので、そのように、下位動詞が語彙的に付与した特殊な格をそのまま受け継ぐということである。これは正に、使役文の「てある 2」構文で下の使役動詞によって指定された与格が上位の結果動詞「ある」の項に現れるのと同種の現象と見ることができよう。つまり、このことは「ある」もまた繰り上げ動詞であることを強く示唆するものであると思われる。

以上、使役文が「てある 2」構文に現れる例を通して、「てある 2」が繰り上げ構造をとっていること、それに関連して、「てある 2」の特徴である、非主語への主格付与が、上位動詞「ある」によるのではなく、下位動詞の下位範疇化情報の一部として語彙的に付与されるものであるという 2 点に関する証拠を見てきた。

## 6 願望文と下位動詞の下位範疇化素性

さて、「てある 2」が一見自動詞化と見える表面的な操作を経ることに関連して、上で、下位動詞の下位範疇化素性がどのようなものになっているのかについて考察した。簡単に言うと、少なくとも 2 つの可能性があり、1 つには、語彙規則により、下位動詞の下位範疇化素性から、主語にあたる名詞句を文字どおり削除してしまうこと。もう 1 つの方法としては、下位動詞の主語を削除することはせず、単に、上位動詞「ある」の項が下位動詞の目的語と統語・意味構造を共有すると指定する方法がある。この後者の方法をとっても、下位動詞の下位範疇化情報の中で目的語への主格付与がおこなう語彙規則が必要である。この 2 つの可能性に関して、後者の方を選択した。ここではこの点に関してその動機付けについて考えたい。

この 2 つの方法は、ここでのデータに関する限り、同等の説明力をもつ。そのため、どちらがより望ましいかについては、別の観点から、例えば全体の文法体系に鑑みて考えるべきであろう。例えば、語彙規則というのは大変強力な方策である。上に挙げた 2 つの方法のうち 1 つめの語彙規則に関して言えば、これは、全ての他動詞について、それとほとんど同じ性質をもつが主語がないというタイプのものがあるということになる。もちろん、なんらかの制約を加える方法で過剰生成は防げるかも知れないが、それでも 1 つではなく複数の構文の生成に関与するような語彙規則があれば、その方が文法体系としては余剰性が低く、より望ましいであろう。このような点で、願望文は、下位動詞の下位範疇化素性についてのここでの主張に動機づけをあたえてくれると思われる。

日本語には、2 種の願望文が存在する。1 つは不定詞の下位動詞に願望を表す上位動詞「たい」（形態的には形容詞）を続けるもの、もう 1 つは動名詞型の下位動詞に上位動詞「欲しい」を続けるものである。前者は、主語の指示対象が自分で何かをしたいときに用い、後者は、主語の指示対象が他者に何かをして欲しいときに用いる。次に挙げるのが、この両者の例である。

- (25) a. 私は本を読みたい。  
b. 私は京子に本を読んで欲しい。

興味深いことは、このときの下位動詞の目的語は、次に示すように、対格でなく主格を受けることも可能だと言うことである。

- (26) a. 私は本が読みたい。  
b. 私は京子に本が読んで欲しい。

このときの主格付与は、「てある 2」の場合と大変よく似ている。というのも、この主格は、「てある 2」の場合と同様、本来対格を受ける直接目的語にしか付与されず、次の例で示されるように、もともと与格を受けるような間接目的語には付与されない。

- (27) a. 私は太郎に本が送りたい。  
b. \*私は太郎が本を送りたい。
- (28) a. 私は京子にこの本が太郎に送って欲しい。  
b. \*私は京子にこの本を太郎が送って欲しい。

この点において、願望文の主格付与は、与格目的語への主格付与を許す受動文や難易文 (tough sentence) の主格付与と対比を見せ、同時に「てある 2」の主格付与との共通点を示すのである。恐らく主格付与に関しては、「てある 2」と願望文は共通の過程によって付与がおこなわれると考える方が余剰性を回避するという点で望ましいであろう。

さて、願望文はどんな統語構造を持っているのであろうか。意味の点から考えても、最も自然な考え方は、同一名詞型の制御構造と思われる。厳密には、「たい」文は、主語の指示対象が何かの行為を行なう意志を表明しているのであるから、志向型的主語制御構造、「ほしい」文は、主語が目的語の指示対象に何かの行為を行なってもらいたいという一種の要求を表しているのであるから、影響型 (influence-type) の目的語制御構造と考えるのが妥当であろう (Pollard & Sag 1994)。願望文は格付与以外は通常の制御文の構造を備えているのであるから、願望文の下位動詞は、目的語に対格が付与されるものと主格が付与されるものがあるものの、その項の数や文法機能には変更を加えられていないはずである。つまり、換言すれば、願望文の生成に必要な操作とは、下位動詞の下位範疇化素性のうち、項の数や文法機能には変更を加えず、ただ目的語に主格を付与する語彙規則ということになる。これは正に、「てある 2」に関して想定したのと同じ語彙規則であることに注意されたい。つまり、このタイプの語彙規則は、「てある 2」がなくとも願望文用に必要な規則であると考えられ、この規則を用いることで、「てある 2」用の特殊な規則をわざわざたてなくてもよいことになり、文法体系内での余剰性を防ぐことになるのである。

## 7 結論

以上、「てある 2」結果構文を観察し、(1) 結果を表す助動詞「ある」は繰り上げ動詞であること、(2) その「ある」の項である名詞は、「てある 1」では下位動詞の主語と、「てある 2」では下位動詞の目的語と、それぞれ統語意味素性を共有していること、(3) 特に「てある 2 文」の項の主格は、下位動詞の下位範疇化素性の一部として付与されていること、さらに、(4) 「てある 2」の下位動詞は、その下位範疇化素性のうち、項の数や文法機能には変更を加えず、目的語に対格ではなく主格を与えるような語彙規則を経ているということを主張してきた。

最後に、以上の議論を踏まえて想定される、2 種の「ある」の素性構造を簡単に挙げておく。「てある 2」の「ある」の素性構造のうち、[+ST] とは、上に挙げたような、主格を付与する語彙規則を受けた動詞につけられる主辞素性 (head feature) と考えられる。つまり、この素性により、「てある 2 文」の下位動詞はこの規則を受けて目的語に主格を付与されたものに限ることが保証されるのである。

(29) 「ある」(「てある 1 用」)

SYNSEM LOCAL	CAT SUBCAT	$\langle \boxed{1}, VP[GER, SUBCAT(\boxed{1} NP)]: \boxed{2} \rangle$	
	CONT	RELN	result
		SOA-ARG	$\boxed{2}$

(30) 「ある」(「てある 2 用」)

SYNSEM LOCAL	CAT SUBCAT	$\langle \boxed{1}, VP[GER, +ST, SUBCAT(NP, \boxed{1} NP)]: \boxed{2} \rangle$	
	CONT	RELN	result
		SOA-ARG	$\boxed{2}$

## 謝辞

本稿の研究は「制約に基づく日本語の構造の研究」の共同研究会での発表をもとにまとめたものである。ここに、研究会に参加下さった方々に感謝を捧げたい。特に、貴重なコメントとをいただいた Peter Sells 氏、小野芳彦氏、矢田部修一氏、橋田浩一氏には、名を記して謝意を表したい。なお、言うまでもなく、本稿に述べられている見解などについては、筆者一人が責任を負うものである。

## 参考文献

- Gunji, T. (to appear). On lexical treatment of Japanese causatives. In Sag, I. & Pollard, C. (Eds.), *Readings on HPSG*. Center for the Study of Language and Information, Stanford University, Stanford. 平成 5 年度科学研究費補助金 (一般研究 (B)) 研究成果報告書, 『日本語句構造文法に基づく効率的な構文解析の研究』, pp. 131–150.

- Kuno, S. (1973). *The Structure of the Japanese Language*. The MIT Press, Cambridge, Mass.
- Martin, S. (1975). *A Reference Grammar of Japanese*. Yale University Press, New Haven, Connecticut.
- Matsumoto, Y. (1990a). Constraints on the 'intransitivizing' resultative -te aru construction in Japanese. In Hoji, H. (Ed.), *Proceedings of the First Conference of Japanese and Korean Linguistics*, pp. 269–283. Center for the Study of Language and Information, Stanford University.
- Matsumoto, Y. (1990b). On the syntax of Japanese "intransitivizing" -te aru construction: non-lexical function changing. In *Papers from the 26th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp. 277–291. Chicago Linguistic Society.
- Pollard, C. J. & Sag, I. A. (1994). *Head-Driven Phrase Structure Grammar*. The University of Chicago Press, Chicago.